

□ 特 集 □

精神療法の技法と理論

—とくに人間関係と治療像をめぐる—

司 会 九州大学教授 池田 数好

副司会 南山大学教授 荻野 恒一

第3回日本精神病理・精神療学会シンポジウム*

□ は じ め に □

精神療法の理論と、それからうまれる技法の問題は、いつでも、それらの背景にある共通した問題にゆきあたる。それは、治療者がいつたいどのようなパーソナリティ論をもち、治療対象についての、どのような疾病論、たとえば神経症理論をもっているか、ということである。これらの背景なしには、体系的な精神療法は構想されない。逆に、たとえば責任のある神経症理論は、そのうしろに、その理論にもとづく精神療法の体系をもっているはずのものである。

これらの基本的な背景と、それが精神療法の実際の上に、どのように生きているかを具体的にみるためには、第1に、重要なのは、治療者・患者関係にたいしてもつているその療法の姿勢を参考

にすることである、とわれわれは考えたいのである。精神療法の、重要であるにもかかわらず、きわめて客観化しにくい点も、実はこのなかにひそんでいる。おなじように、第2の重要な点は、その療法が、どのような治療像を指向しているのか、いつたい治療とはどのようなことだと考えているのか、といった具体的な点を比較検討することであろう。

以上のような意味で、現在第一線で活躍しておられる各学派の、代表的な演者から、以上の点についての思索や経験をおききすることは、精神療法のもつ、もつとも困難な問題のひとつを解明する手がかりになると期待していたし、その期待はある程度みたされたと考えるのである。

ただ副司会の荻野さんからの適切な御助言の数数をいただいたにもかかわらず、全般的な司会のやりかたがはなはだ不手際で、各演者のもちあじや、会員のかたの御見解を十分に発表していただく配慮に欠けたような結果になってしまったことをおわび申し上げたい。 (池田 数好)

* 1966年10月15日 於福岡市明治生命館ホール